



## 『新型コロナウイルス感染症』

井 上 英 士 会 員

本日は今話題の新型コロナウイルス感染症についてお話しします。

2019年12月中国湖北省武漢で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID19）は、瞬く間に世界中にパンデミックを発生させ、まだまだ治まる気配はありません。このウイルスは弱毒ですが、長引くと変異株を新生するなど軽くみてはいけません。大ヤケドするような病原性を発揮するからです。変異株が次々と発生していることなど、軽くみてはならない代物です。2021年9月の時点で9種類の変異株を認めていますが、さらに最近では『オミクロン株』が発生しています。これらの変異株はスパイクタンパクと言われる構成アミノ酸が変異するため、人類には危険な、しかも対応困難なウイルスに変異します。

日本でも、2021年3月からアルファ株が国内感染症の主体となりましたが、さらに6月にはデルタ株が増え、その割合は半数を超えて拡大。第5波の主体となっています。

さらにこの数日、オミクロン株の発生がニュースになっています。これらのウイルスはインフルエンザとの鑑別が困難ですが、いずれも素早い対応処置が必要です。インフルエンザウイルスとの鑑別は大変困難な問題で流行の兆しがあれば、COVID19とインフルエンザ、双方の検査を素早く実施いたします。COVID19系変異株は医療機関ならどこでも検査というわけにもいかず、限られ指定されています。

### これらの感染症対策をどうするべきか

まず、基本は日常生活の中で、感染、接触、エアゾル即ちマイクロ飛沫感染のリスクを意識的に注意してマスクの正しい装着及び手指衛生の徹底をすることが基本です。

デルタ株はアルファ株の2倍の要入院、隔離を要するといわれています。これらのウイルスは今までとは異なり、味覚、嗅覚が低下するのが特徴です。このように変異株により、少しずつ異なった症状で発症するので厄介です。

### 新型コロナウイルス感染症検出、検査のための注意点

本ウイルスの検出には特に精度の高いPCR検査が用いられますが、その他はウイルスを直接検査する抗原検査もあります。この抗原検査には定量検査と簡易定性迅速検査があります。迅速検査では約10分間で判定できるため、同じ検体でインフルエンザとの同時測定が可能です。ただし、それぞれの検査キットには検査するためのしぼりがあり、また、偽陽性、偽陰性が少数ながら存在するため、その判定は患者の症状などにも考慮して慎重に判定する必要があります。

## 重症度分類

臨床症状や経皮的酸素飽和度、即ちSPO2及び画像所見より判断することが多い。呼吸困難はなく、SPO2 96%以上で、画像陰影でも肺炎所見はない場合は軽症。また、呼吸困難や肺炎所見を認め、SPO2 94%以上、96%以下は中等症と判断される。さらにSPO2 93%以下で酸素吸入を要する場合は中等症Ⅱ。さらにICUでの管理、人工換気、酸素吸入を要する場合に重症と判断する。

## 治療についての評価

国内ではこれまでレムデシビル（RNA合成酵素阻害薬）、デキサメタゾン（ステロイド薬）、バリシチニブ（免疫抗制薬）、カシリビマブ／イムデビマブが治療薬として承認されていた。これらは重症度に応じて使用される。

抗体カクテル療法については、非特異的に多くのウイルス感染症に有効で、COVID19でも発症早期からの投与に有効で、重症化を抑制します。初期治療では外来でも使用できます。

抗ウイルス薬でもあるレムデシビルは中等度以上のCOVID19の患者に投与します。また、抗炎症作用や免疫抑制作用として、デキサメタゾンやバリシチニブは酸素投与が必要な中等度Ⅱ以上の患者に投与されます。

他にトシリズマブ、タバレメクチン、イベルメクチン（抗寄生虫薬）、他に感染症指定医療機関で使用されています。今後は自宅療養患者の重症化を防ぐためにも、初期からの治療に適用されることが望まれます。

## インフルエンザの流行を想定した合理的な検査の進め方、及びその結果を知っておく必要性

インフルエンザ迅速診断キットの感度等を知っておく必要があります。特に未だ、鼻咽頭粘液を用いたPCR検査が有効で、これを推奨します。

以上多少分かりにくい話ですが保管され、参考にされることを期待しています。